

蜃気楼



mikatuki98

健太は雪子に出逢ってからというもの、雪子の明るさと快活さに、雪子と一緒に居るとどんな事でも成し遂げられるような気持ちになっていた。雪子は健太にとって、今まで出逢ったことの無いタイプの女性だったのだ。それゆえに新鮮な印象を健太に抱かせ、その新鮮さが神秘性にも感じられた。そして雪子と付き合いながらも、心の奥底では遠く手の届かない、憧れの気持ちさえ健太は持っていた。

ところが二人が出逢ってから、一年が過ぎた頃だろうか。お互いの都合で会える時間が少なくなり、健太は雪子とのコミュニケーションが上手く取れなくなっていた。頻繁に会えていた頃と違って明らかに内向的な性格に戻って来た健太。しかし健太は、自分からはなかなか連絡をして来ない雪子に、自分の方から何度も連絡をして、会えない理由を問いただそうとはしない。それが健太の雪子への思いやりなのか、単なる自分のプライドなのか、それとも内向的な性格のなせる業なのか、本当のところは彼自身でもよく分からなかった。

唯、お互いが何となく夫々の時を過ごし、二人の時間が曖昧に流れて行った。その間、二人で居る時間は夫々の心の中だけに存在するかのようだった。つまり健太が心の中で雪子を想い、雪子が心の中で健太を想う。その想いの重なりが、実際にはどれほどあったことだろう。それを確かめる術もないままに時は流れるばかり。そしていつしか、健太は当然の如く、雪子との関係に疑問を持つようになって行った。

『僕たちは、本当に恋人同士なのだろうか？』

健太は時を遡り、自分の気持ちを確認した。

『雪子は僕と出逢った時、前の恋人に死に別れた寂しさを心の奥底に抱えていた。だから僕は、少しでも雪子を支えてあげたい、と素直に思った。そんな僕の気持ちを知って、雪子は少しずつ僕に心を開いてくれるようになった。それからというもの、僕以上に明るく元気な本来の快活な雪子に戻って、僕は少し驚くと同時に心から喜んだ。それに何よりも僕は雪子のあの何とも言えない魅力に惹かれた。声は幼く舌足らずに喋るのに、僕を見つめる瞳は潤んでいて、その色気にゾクッとする程だ。でも全体の雰囲気は神秘的で彼女が其処に居るだけで、辺りの空気が澄み切って行くようにさえ感じる。それに痛みのない艶やかな少し栗毛色の毛先がフワリとカールして、僕はふとそれに触れたい衝動に駆られてしまう。嗚呼、だけどあの時、出逢ったのがたまたま僕で、雪子にとっては本当は他の男でも良かったのかもしれない。いや、雪子は僕を愛していると何度も言ってくれた。そうだ、一昨日だって今度も会えないという電話をくれたけど、最後は<健太愛してる>って言ってくれたんだ。でも…… 本当に雪子は僕を愛してくれているのだろうか？ そして僕は雪子を……。嗚呼、雪子！僕は君への自分の気持ちさえ、何だか分からなくなって来た』

悶々と悩める健太は、外見的には女性好みのする容姿で、立ち居振る舞は紳士的だが、見方によってはプレイボーイ風にも見える。しかしその実、彼の何面はとても古風で、しかも傷付

き易い繊細で優しいハートの持ち主なので、遊び感覚で女性とは付き合えない男だ。 唯、その繊細な優しさ故に、恋人の死に直面した雪子の辛い心の内を見抜くことが出来たのだろう。

しかし、ロマンチストとも言えるそんな彼の心の奥底には、密かに映画のような情熱的な大恋愛をしたいという願望も潜んでいた。 例えば、外国へ駆け落ちするような、自分の今の現実から全く違った世界への逃避行を実行に移してくれるようなエネルギーの融合。 それはある意味、自分の中の破滅願望を満たしてくれる女性を、むしろ求めていた。

結局、健太は無意識のうちに、そんな非現実的な夢を明るく快活な性格に変貌した（と言っても本来の性格だったのが）雪子の中に見ていたのだろう。 そしてお互いの波長が引き寄せたのか、実は雪子自身も健太と同じ夢を追い、彼の中に現実逃避と言う自分と同じ世界へ向う希望の光を見ていたのだった。

ならば何故！？ 雪子は健太と会わず、いや、会えなくなってしまうのか……

<運命>とは、自らが導くもの。 されど<宿命>に至っては、現実世界における自分の意思とは無関係に、この世に生まれ落ちた瞬間に定められているものである。

健太と雪子にとって、それが幸運なのか不運なのかの断定は出来ない。 が、皮肉なことだと言っておこう。 つまり、健太と雪子の気持ちがどうあれ、雪子の人生のシナリオもまた、その宿命から逃れることは許されなかったのである。 果たして、どんな宿命だったというのか？

雪子が健太に真実を語ることもなく、また健太が雪子の真実を知らされることもなく、月日は流れ、ある日健太の元へ、消印の無い一通の封書が届いた。

魂は 永遠です。

わたしは 健太を永遠に 愛します。

See You Again 雪子

住所も書かれていない手紙には、宿命を意味する内容は無いも書かれていなかった。 唯、もう会えないという現実。 健太は封書を受け取り、手紙を読むと直ぐに雪子に電話を掛けた。 しかし最早、通じない番号となっていた。

手紙の終わりに綴られた雪子の最後の言葉を何度も何度も目で追う健太。 健太は砂漠のど真ん中に唯ひとり、雪子に置き去りにされたような気持ちになり、そのまま心を深く砂に埋もれさせて行った。

「嗚呼！ 僕が今まで見ていたものは、全てが蜃気楼だったというのか……」

最後まで理由を告げずに何処かへ消えてしまった雪子。 その存在は、健太の心の中で永遠に辿り着けないオアシスとして残されてしまった。 そして健太の中で、呪文のように繰り返される雪子の最後の言葉が、一生を掛けて健太の心を風化させて行ったのである。

すくっても すくっても
こぼれる
砂のように
僕を誰も
すくえない

一滴の水を 時々下さい
一生の愛は
いりません

一瞬の愛を 時々下さい
永遠に水は
枯れません

すくっても すくっても
こぼれる
砂のように
僕を誰も
すくえない
僕を
誰も
す
く
え
な
い